

編集後記

◇本誌100号の「いも類振興会60年の歩み」の中で、いも類振興情報5号からの表紙に「サツマイモの蔓に2輪の花を配した青緑色の版画」が使用されたと述べた。その経緯について関係者に問い合わせたが不明であった。先日、(財)いも類振興会に永年勤務された池城節子さんから、記憶が蘇ったとして次の情報をいただいた。

昭和25年に設立された(財)諸類会館の源流である諸類加工協会が、昭和23～24年頃に機関誌「諸類加工」を刊行した。だが、2号までで中止となった。この「諸類加工」の表紙を飾ったのが、サツマイモの蔓に2輪の花のイラストだったという。このイラストは、「本職の画家に頼んで描いてもらったものだ。」と、いも類振興会2代目理事長の生天目健蔵氏が語っておられたそう。そして、いも類振興情報が昭和59年から刊行され、生天目理事長の意向で、「諸類加工」の表紙であったイラストをいも類振興情報の5号から再活用することとなったという。

では、本誌表紙のイラストの素材は何だったのか?。日本甘藷馬鈴薯(株)が昭和23年8月に出版した「さつまいも及びじゃがいもの渡来」の中に、サツマイモの蔓に2輪の花を描いた精巧で綺麗な口絵がある。たぶん、これが本誌表紙のイラストの素材であったに違いない。ただ、この口絵の原典は何か、未だ不明である。

◇本誌101号の特集として、サツマイモ振興の基本となる「サツマイモの新品種」を紹介することとした。平成21年は3つの新品種育成があり、加えて平成16年以降に育成された品種を含む7品種について、その特性を中心に紹介いただいた。解説をお願いした(独)農研機構の小巻部長をはじめ、作物研究所と九州沖縄農業研究センターの研究者の皆様に、お礼申し上げたい。

◇今、「健康」に対する国民の関心が極めて高い。そこで、津久井亜紀夫氏からいも類の機能性、特にいも類の特徴の一つである食物繊維と健康との関係について、難しい事項を平易に解説いただいた。サツマイモ、ジャガイモを食生活の中へ上手に取り込み、健康に過ごしていきたいものだ。

西尾敏彦氏からは、「北海道のジャガイモを愛した2人の男爵」と題して、湯地定基男爵と川田龍吉男爵のジャガイモ振興における功績を中心に紹介いただく。川田男爵は「男爵薯」の普及で有名だ。一方、湯地定基男爵は、知名度がやや低かったように思う。今回、湯地男爵の人物像へ、多面的に光を与えていただいた。

◇川越市内にあった「サツマイモ資料館」は、平成20年6月1日に閉館した。その後、約1,000点の資料は川越市立博物館に一括寄贈された。同博物館では平成21年7月25日～9月23日まで「サツマイモ」をテーマに第19回収蔵品展が開催され、私も8月23日に見学した。川越市という公的機関で、サツマイモに関する貴重な資料が大切に引き継がれたことに感謝したい。

(狩谷 昭男)